

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第430号 平成24年11月7日

ダモクレスの剣

ダモクレスは、紀元前4世紀頃の人で、シラクサの僭主・ディオニュシオスの廷臣とされる人物です。ある日の事、彼は、ディオニュシオスの権力と栄光を羨ましく思い、ほめそやすと、後日、ディオニュシオスから豪華な宴に招待されます。豪華な宴の中、彼は玉座に案内され坐らせられるのですが、ふと天井を見上げると、今にも切れそうな細い糸で、剣が吊るされており、ダモクレスは慌ててその席から逃げ出してしまいます。

この故事は、ディオニュシオスがダモクレスに対し、如何に栄耀栄華を極めている王といえども、その立場は常に危険に満ちたものだという事を示したというもので、ここからヨーロッパでは、「ダモクレスの剣」を常に戦々恐々としている状況、あるいはそのような状況をもたらすものの喩として用いられるようになっていきます。

「ダモクレスの剣」という故事は、米国のケネディ大統領が1961年に国連で言った「地球上の全ての住民は、核というダモクレスの剣の下で暮らしている」という演説で大変有名になりました。昨年の福島第一原発事故を目の当たりにして、改めて「ダモクレスの剣」という言葉を思い起こした方も多かったのではないかと思います。

このように、繁栄に酔いしれている人々への警句として使われる「ダモクレスの剣」ですが、私には、どうもその用法は違うのではないかと思えてなりません。つまり、「ダモクレスの剣」というのは、将来巨大地震が発生するとか、狂人がボタンを押して世界中が核戦争に巻き込まれる、といったような危機を指している訳ではないと思えるのですが如何でしょうか。

先程、「ダモクレスの剣」は、戦々恐々とした状態の喩として使われていると述べましたが、戦々恐々としたのはディオニュシオスの代わりに玉座に坐ったダモクレスであり、他の賓客には多分その剣は目に入らなかったに違いありません。

では、ディオニュシオスは戦々恐々として日を送っていたかといえ、逆に、ダモクレスが羨む程の生活をしています。しかもディオニュシオスは、自分の頭上には常に鋭い剣が自分を狙っていると自覚していました。

ディオニュシオスは暴君であったと伝わっていますが、見方を変えれば、常に危機管理を怠らなかつたともいえるでしょう。それが、僭主として玉座に坐ったディ

オニュシオスの覚悟というべきかも知れません。

私は、「ダモクレスの剣」の故事は、玉座に限らず、総理大臣の椅子や会社社長の椅子、もっと卑近な事をいえば、私の坐っている理事長の椅子も含めて、その全ての椅子の頭上には、常に、それぞれの椅子に応じた危機や危険が待ち受けているという事を示しているのだと思っています。

ディオニュシオスの時代であれば、いつ何時命を奪われるかも知れないという程の危機であり、ダモクレスならずともビビります。勿論、現代では、命と引き換えの椅子というものはありませんが、その代わり、何か事が起これば責任を取らなければなりません。そういう意味では、誰しも、自分の席にただ安住している事は許されないというべきでしょう。

昨日は、イタリアでの裁判から「安全宣言に対する」責任について考えてみました。

あの判決は、学者の自由な発言を阻害する事になり問題だという批判も起きていますし、学者たちに大きな衝撃を与えたことは想像に難くありません。

しかし、イタリアの裁判で当事者となった学者の方々は、専門家として高い評価を受け、社会的にも大きな影響力があったのであり、彼等には、その地位に相応しい責任が課せられていたというべきです。

あの裁判で問われたのは、予測が外れた事ではなく、根拠のない楽観を振りまいた事なのではないでしょうか。

裁判の様子をテレビで見た時、学者達が、まるで「ダモクレスの剣」に撃たれたように、顔を覆い、悄然としている姿は印象的でした。(塾頭：吉田 洋一)